清水正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ㉕

クモの知られざる世界と赤い実にまつわる話

クモ学事始め

クリスマスも過ぎる頃、わが家のユキヤナギは真っ黄色に染まり美しい姿を見せています。また前号で掲載したフヨウやムクゲはなんと一二月中旬まで咲いていました。私の知る範囲では、こんなに遅くまで咲いていたのは初めてです。毎回のように記していますが、気候変動は驚くことを私たちに日々提供してくれています。しかし人々はそれをどこまで受け止めているのでしょうか。

「一里一尺」の原稿を書いていると毎回のようにパソコンのそばに可愛らしいクモ（ハエトリグモ）がやって来ます。今もやって来てこちらを見上げるような仕草をするので「こんにちは、元気か」と声をかけてやります。

そこで今号は植物から少し離れてクモくんに登場してもらおうと思います。クモはその姿から嫌がる人も多く、特に大きなクモは怖がる人もいます。しかし私は「朝のクモは殺すな」と親から言われて、今でも朝でなくてもクモは殺さないようにしています。

空飛ぶクモ

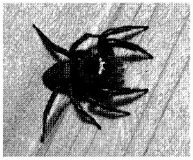
私がクモに関心を持つようになったのは自然観察指導員京都連絡会の一員になってからです。観察会の時、一人の会員が指先にクモをつけ高くかざすとクモが天に向かって飛んで行きました。私はビックリ、そんなことを見たのは初めてです。子グモたちが新しい天地を求めて行う行動でバルーニングということだと教えてもらいました。

他にもクモに興味を持つ人がいて、いろいろな所でクモを見つけては見せてくれます。形もいろいろで、巣も色々な形をしています。当時私の知るクモと言えば藪を歩けば顔にひっかかる、ＴＨＥクモと言える六角形の巣しか知りませんでしたから、見るもの全て新鮮

でした。生垣にはハンモックのような巣を張り端に隠れて獲物を待つクモ、立体的な巣を張るクモ、巣の真ん中にゴミを集めて隠れて待つクモ、四阿の屋根の下、ベンチの下の隅に細かな網が重なったような巣、渦巻き模様を入れた巣。こんなに巣に色々な形や色のクモがいます。

中でも驚いたのは道脇の斜面に開く扉を持ったクモ、扉が閉まると全くの地面そのもので見つける事は容易ではありません。ある自然公園に行ったとき、そこの案内人が落ち葉掃除に使うブロワーを持ってきて、斜面に吹きかけるとクモの巣の扉はパクパクと動くではないですか。なるほどこんな使い方もあるのだと感心しました。このクモはトタテグモというそうです。皆さんもクモが嫌いでなかったら、クモの巣を見つけたら、指で少しダブルタップしてみると隠れていた巣の主がどこかから顔を出します。どんなクモが現れるでしょうか。

トタテグモ


マミジロハエトリグモ

巣のないクモ

話を先に戻します。パソコンのそばにやってくるクモくんはどこに巣を持っているのでしょうか。彼は何と巣を張らないクモなのです。意外や意外、巣を張らないクモは結構いて待ち伏せタイプと歩き回って狩りをするタイプがあるみたいです。ハエトリグモは歩き回るタイプのようで常に歩いたり飛び跳ねたりしています。クモは巣を張るものだと思っていましたが、これを聞いてまたまたビックリ。よく見かけるけどほとんどクモについては知らないも同然です。まだまだクモの未知の世界が広がりますがこれぐらいにして、興味が湧かれたら「クモのイト」（中田兼介著　ミシマ社）を読んで頂くと驚くことだらけで、はまってしまうかもしれませんよ。

物干しで考える自然の循環

もう少し不思議に思った話だけどよく考えれば当たり前の話をします。わが家のもの干しデッキには色々なものが落ちています。夏の終わりクマゼミの死骸が転がっていました。片付けることもなくほっておきました。秋がきて、野分吹く頃になっても朽ちることも

なくまだそのままで転がっています。よく見るとカナブンの死骸も同様に転がっています。一瞬どうしてだろうと疑問が湧きましたが、少し考えると物干しデッキはコンクリートの上を防水の塗装剤で塗られています。木材や土壌は全くありません。死骸を餌にして分解してくれる菌類や土壌生物がいない無機の世界だということに気付きました。自然界と違う中では土にかえることすらないのです。変化をしないことによって改めて菌類や土壌に棲む微生物たちの力を目の当たりに見ました。

赤と緑はクリスマスカラー
～セイヨウヒイラギ、アオキ～

年末年始はクリスマス・正月と大きな行事が続き一年で最も人が寄り合うことが多い季節です。そしてめでたい赤色の木の実がもてはやされます。クリスマスリースには魔除けも兼ねてセイヨウヒイラギ（クリスマスホーリー）が濃い緑のモミの葉とともに飾り付けられます。赤と緑はクリスマスカラーとして人気があります。欧米人はことのほか好きなようです。

セイヨウヒイラギ

日本ではサルトリイバラ（サンキライ）の実がリース材料として人気があるようです。山野に入れば一二月頃は多くの木の葉が落ち、サルトリイバラがやたらと目立ちます。今年も沢山採ってリース材料にと観察会の記念品としてあげました。しかし刺があるので結構採るのは大変です。この実は時が経っても赤さが残り、飾り物には最適です。実は食べることができますがカスカスで今ひとつといった所です。しかし猿は結構好きなのか、以前採った実の付いた蔓をデッキに置いていたら、猿にしっかり食べられてしまったことがありました。別名にサンキライ（山帰来）という呼び方もありますが、これは「むかし、病を患って山にこもった人がこれによって治り山から戻ってきた」ことによるといわれています。今年の春にはにょきにょきと蔓を出し大きな葉をいっぱい付けると思います。カシワの木があまりない地方ではかしわ餅でなく、この葉を使いいばら餅として利用していました。

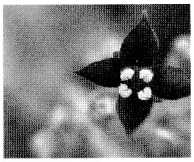
サルトリイバラ

セイヨウヒイラギが魔除けとし

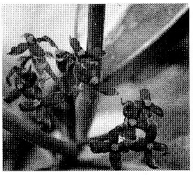
て飾りに使われるなら、日本では二月の節分に在来種のヒイラギの小枝に鰯の頭を刺して魔除けとして使われます。どちらも葉の縁に棘状の鋸歯があることで邪気を払うということでしょう。

緑と赤のクリスマスカラーの代表のようなアオキは、秋頃から実は徐々に大きくなり赤味を増し節分の頃すっかり実を赤くしていることと思います。実は長さ一・五～二cm位の俵型で目立ちます。中におかしな形で赤の中に緑が混じったりしているものがあります。これは実に虫が入ったことによる変化で虫こぶと言われるものです。

アオキの実



アオキの雄花



アオキの雌花

因みにこの実を半分に割ると中から幼虫が出てきます。アオキと呼ばれるのは葉だけでなく木も緑で常緑であることからといわれており、学名もAucuba japonica（Aucubaは青木葉の意味です）として日本在来種として記載されています。やはりこの赤と緑のコントラストにヨーロッパ人は魅了されたようで一七八三年にイギリス人ジョン・グレファーが英国に雌株を持ち帰りましたが雄株がないので結実せず、約八〇年後の幕末にロバート・フォーチュンがきて雄株を持ち帰り、赤い実が結実、英国で人気を博しました。

このことからもわかるようにアオキは雌雄異株です。雌雄ともに四弁のえんじ色をした小さな花が集合して円錐花序になりますが、雄花序は雌花序よりも大きいです。そして雄花は四本の雄しべで黄色い葯を付けます。雌花は中心にひとつの緑色の雌しべを付けます。花の咲く時期は雄花が咲き後に雌花が咲くというように意図的にずらしています。小さいですがえんじ色に黄色のコントラストはなかなか美しく見物です。アオキは木々の陰でも生育し日本の多くの地域で普通に見られますが、昨今ではこれを好餌とするシカによる食害に遭っています。

日本人は縁起物が好き ～万両・千両・百両……～

正月の縁起物としても赤い実は人気で、年末になると露天などで赤い実のつく木を植木鉢に植えて

売っています。万両（マンリョウ）、千両（センリョウ）、百両（カラタチバナ）、十両（ヤブコウジ）、一両（アリドオシ）です。最初の二種を除けば、この二種に倣い別称として金の多寡の名前を付けています。「万両千両在り通し」などと語呂合わせで、豊かであることを願っての植栽もあります。

この中でマンリョウは鳥が実を運ぶのか山や林の中にも沢山自生をしています。ヤブコウジも同じくどこにでも見られます。自生のカラタチバナとなるとなかなか見られません。センリョウに至っては自生を見るのはまず難しいと言えます。

カラタチバナ

マンリョウ

センリョウ

ヤブコウジ

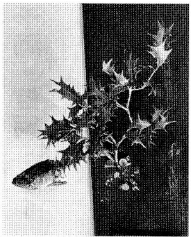
オオアリドオシ

アリドオシ

ツルアリドオシの花

アリドオシの自生は両種の間くらいで、少し希と言えます。この名前の由来は少し長めの棘がはえていて、その針が細いのでアリさえも通すということからきているようです。これと似たものにオオアリドオシ。ジュズネノキ、ツルアリドオシというものがあります。オオアリドオシは名の通り葉が大きく棘は短めです。ジュズネノキは根が数珠状で棘がごく短い、ツルアリドオシは名の通りつる性で地面をはっています。近くでは東山トレイルなどでよく見かけます。

日本人は古くから様々な植物を愛で、生活や祭祀に利用したり歌に詠んだりしています。こうした文化的・民俗学的側面から自然を見ていくのもおもしろいですね。小稿が皆様に届く頃、草が芽ばえ、木が芽吹き出す頃となります。道草さんぽで家の周りの草木を探してみませんか。


節分飾り